

シンポジウム

博仁会における実践事例

医療法人博仁会志村大宮病院
理事長・院長 鈴木邦彦

地域包括ケアシステムは、当初高齢者のみを対象としていたが、現在では子どもや障がい者などを含む全世代・全対象型に発展している。

医療法人博仁会を中心とする志村フロイデグループは、茨城県北西部の常陸大宮市(人口3.9万弱、高齢化率37%)を中心に事業を展開している。

当グループの中心は1951年創立の志村大宮病院(178床)であるが、当院のような地域密着型中小病院は、地域包括ケアを支える病院として、行政や自らの実践を含む介護との連携だけでなく、地域や医師会への人材派遣、さらにまちづくりにも取り組むことが求められている。

5町村の合併により誕生した常陸大宮市では、当院のある中心部での「病院を中心としたまちづくり」だけでなく、旧町村毎に「小さな拠点」を設置し、地域性に応じた地域包括ケアを実践している。

当グループのまちづくりの特徴は、2010年に結成された職員有志のプロボノ組織「フロイデ DAN」の存在である。彼らは2012年に開設したコミュニティカフェ「バンホフ」を拠点に様々なネットワークを構築する一方、200名以上のボランティア(フロイデサポーター)を養成し、多様な地域支援の担い手として活動する場を提供している。

当院から徒歩5分のところにJR水郡線常陸大宮駅があるが、フロイデ DANを中心に、冬のイベントとして定着した「常陸大宮駅前イルミネーション点灯式」や、当グループで整備したフロイデリハビリ公園で毎月朝市「ひたちおおみや楽市」を開催するなど、種々のイベント等により、これまで当グループは、「中小病院は地域と運命共同体である」として、地域の活性化に取り組んで来た。

そうした取り組みは、2020年3月に策定された市の「常陸大宮駅前周辺整備計画」にも反映され、「健康づくりをテーマとしたまちづくり」として、当院が医療・福祉ゾーンの中心に位置付けられ、当グループもソフト面で全面的に協力することになった。

ところが、2021年1月からわが国を始め世界中を襲った新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、そうした大規模イベントはすべて中止せざるを得なくなり、まちづくりの取り組み一旦止まってしまった。

しかし、間もなく当グループは、今こそ我々の活動が求められているとして、同年4月より緊急地域支援チームを結成し、コロナ下での地域支援を開始した。そこで生まれたICTやSNSも活用した、より小規模で個別的なサービスは、現在新しいサービスとして定着している。

さらに、コロナ禍では、外出を控えて家に閉じ込めることにより、ADLや認知機能の低下だけでなく、孤立や孤独も深まることが懸念されたことから、フロイデ DANを中心に市民協働提案事業として開始していた、市内92地区に多世代プラットフォームとなる「小さな小さな地点」を作る活動を加速した。

当院のような地域密着型の中小病院は、医療だけでなく、介護や福祉、保健、介護予防から生活支援までを一体的に取り組む必要がある。そうすると当院のような病院は、むしろ「健院」と呼んだ方が適切ではないかと考えている。まちづくりにはコミュニティカフェなど多様なソーシャルビジネスの創設も必要になるが、現行の医療法人制度では、社会医療法人以外は収益事業が認められておらず、民間の創意工夫を発揮したまちづくりに支障を生じている。時代に合わせた医療法人制度の見直しが求められる。